公肇區印全集

第十三卷

谷崎潤一郎全集　第十三卷
定價一五〇〇圓
昭和四十二年十一月十一日印刷
昭和四十二年十一月二十五日發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　山越　豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

吉野葛

昭和六年一月號—二月號「中央公論」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その一　自天王

私が大和の吉野の奥に遊んだのは、既に二十年程まへ、明治の末か大正の初め頃のことであるが、今とは違つて交通の不便なあの時代に、あんな山奥、――――近頃の言葉で云へば「大和アルプス」の地方なぞへ、何しに出かけて行く氣になつたか。――――此の話は先づその因縁から說く必要がある。

讀者のうちには多分御承知の方もあらうが、昔からあの地方、十津川、北山、川上の莊あたりでは、今も土民に依つて「南朝樣」或は「自天王樣」と呼ばれてゐる南帝の後裔に關する傳說がある。此の自天王、――――後龜山帝の玄孫に當らせられる北山宮と云ふお方が實際におはしましたことは專門の歷史家も認めるところで、決して單なる傳說ではない。ごくあらましを搔い摘まんで云ふと、普通小中學校の歷史の敎科書では、南朝の元中九年、北朝の明德三年、將軍義滿の代に兩統合體の和議が成立し、所謂吉野朝なるものは此の時を限りとして、後醍醐天皇の延元々年以來五十餘年で廢絕したとなつてゐるけれども、そのゝち嘉吉三年九月二十三日の夜半、楠二郎正秀と云ふ者が大覺寺統の親王萬壽寺宮を奉じて、急に土御門內裏を襲ひ、三種の神器を偸み出して叡山に立て籠つた事實がある。此の時、討手の追擊を受けて宮は自害し給ひ、神器のうち寶劍と鏡とは取り返されたが、神璽のみは南朝方の手に殘つたので、楠氏越智氏の一族等は更に宮の御子お二方を奉じて義兵を擧げ、伊勢から紀井、紀井から大和と、次第に北朝軍の手の

屈かない奥吉野の山間僻地へ逃れ、一の宮を自天王と崇め、二の宮を征夷大將軍に仰いで、年號を天靖と改元し、容易に敵の窺ひ知り得ない峽谷の間に六十有餘年も神璽を擁してゐたと云ふ。それが赤松家の遺臣に欺かれて、お二方の宮は討たれ給ひ、遂に全く大覺寺統のおん末の絶えさせられたのが長祿元年十二月であるから、もしそれ迄を通算すると、延元々年から元中九年までが五十七年、それから長祿元年までが六十五年、實に百二十二年ものあひだ、兎も角も南朝の流れを酌み給ふお方が吉野におはして、京方に對抗されたのである。

遠い先祖から南朝方に無二のお味方を申し、南朝びいきの傳統を受け繼いで來た吉野の住民が、南朝と云へば此の自天王までを數へ、「五十有餘年ではありません、百年以上もつゞいたのです」と、今でも固く主張するのに無理はないが、私も嘗て少年時代に太平記を愛讀した機緣から南朝の秘史に興味を感じ、此の自天王の御事蹟を中心に歷史小說を組み立てゝみたい、――――と、さう云ふ計畫を早くから抱いてゐた。川上の莊の口碑を集めた或る書物に依ると、南朝の遺臣等は一時北朝方の襲擊を恐れて、今の大臺ケ原山の麓の入の波から、伊勢の國境大杉谷の方へ這入つた人跡稀な行き留まりの山奥、三の公谷と云ふ溪合ひに移り、そこに王の御殿を建て、神璽はとある岩窟の中に匿してゐたと云ふ。又、上月記、赤松記等の記す所では、豫め僞つて南帝に降つてゐた間嶋彦太郎以下三十人の赤松家の殘黨は、長祿元年十二月二日、大雪に乘じて不意に事を起し、一手は大河内の自天王の御所を襲ひ、一手は神の谷の將軍の宮の御所に押し寄せた。王はおん自ら太刀を振つて防がれたけれども、遂に賊のために斃れ給ひ、賊は王の御首と神璽とを奪つて逃げる途中、雪に阻まれて伯母ケ峰峠に行き暮れ、御首を雪の中に埋めて山中に一と夜を明か

した。然るに翌朝吉野十八郷の荘司等が追撃して來て奮戰するうち、埋められた王の御首が雪中より血を噴き上げたゝめに、忽ちそれを見附け出して奪ひ返したと云ふ。以上の事柄は書物に依つて多少の相違はあるのだが、南山巡狩錄、南方紀傳、櫻雲記、十津川の記等にも皆載つてゐるし、殊に上月記や赤松記は當時の實戰者が老後に自ら書き遺したものか、或はその子孫の手に成る記錄であつて、疑ふ餘地はないのである。一書に依ると、王のお歳は十八歳であつたと云はれる。又、嘉吉の亂に一旦滅亡した赤松の家が再興されたのは、その時南朝の二王子を弑して、神璽を京へ取り戻した功績に報いたのであつた。

いつたい吉野の山奥から熊野へかけた地方には、交通の不便なために古い傳說や由緒ある家筋の長く存續してゐるものが珍しくない。たとへば後醍醐天皇が一時行在所にお充てになつた穴生の堀氏の館など、昔のまゝの建物の一部が現存するばかりでなく、子孫が今にその家に住んでゐると云ふ。それから太平記の大塔宮熊野落ちの條下に出て來る竹原八郎の一族、――宮は此の家に暫く御滯在になり、同家の娘との間に王子をさへ儲けていらつしやるのだが、その竹原氏の子孫も榮えてゐるのである。その外更に古いところでは大臺ヶ原の山中にある五鬼繼の部落、――土地の人はあれは鬼の子孫だと云つて、決してその部落とは婚姻を結ばず、彼等の方でも自分の部落以外とは結ぶことを欲しない。そして自分たちは役の行者の前鬼の後裔だと稱してゐる。すべてがそんな土地柄であるから、南朝の宮方にお仕へ申した鄕士の血統、「筋目の者」と呼ばれる舊家は數多くあつて、現に柏木の附近では毎年二月五日に「南朝樣」をお祭り申し、將軍の宮の御所跡である神の谷の金剛寺に於いて嚴かな朝拜の式を擧げる。その當日は數十軒の「筋目の者」たちは十六の菊の御紋章の附いた裃を着ることを許され、知事代理や郡長等の上席に就くの

である。

私の知り得たかう云ふいろ〳〵の資料は、かねてから考へてゐた歴史小説の計畫に熱度を加へずにはゐなかつた。南朝、――花の吉野、――山奥の神秘境、――十八歳になり給ふうら若き自天王、――楠二郎正秀、――岩窟の奥に隠されたる神璽、――雪中より血を噴き上げる王の御首、――と、かう並べてみたゞけでも、これほど絶好な題材はない。何しろロケーションが素敵である。舞臺には溪流あり、斷崖あり、宮殿あり、茅屋あり、春の櫻、秋の紅葉、それらを取り〳〵に生かして使へる。而も據り所のない空想ではなく、正史は勿論、記錄や古文書が申し分なく備はつてゐるのであるから、作者はたゞ與へられた史實を都合よく配列するだけでも、面白い讀み物を作り得るであらう。が、もしその上に少しばかり潤色を施し、適當に口碑や傳説を取り交ぜ、あの地方に特有な點景、鬼の子孫、大峰の修驗者、熊野參りの巡禮などを使ひ、王に配するに美しい女主人公、――大塔宮の御子孫の女王子などにしてもいゝが、――を創造したら、一層面白くなるであらう。私はこれだけの材料が、何故今日まで稗史小説家の注意を惹かなかつたかを不思議に思つた。尤も馬琴の作に「俠客傳」といふ未完物があるさうで、讀んだことはないが、それは楠氏の一女姑摩姫と云ふ架空の女性を中心にしたものだと云ふから、自天王の事蹟とは關係がないらしい。外に、吉野王を扱つた作品が一つか二つ德川時代にあるさうだけれども、それとて何處まで史實に準據したものか明かでない。要するに普通世間に行き亙つてゐる範圍では、讀み本にも、淨瑠璃にも、芝居にも、つひぞ眼に觸れたものはないのである。そんなことから、私は誰も手を染めないうちに、自分が是非共その材料をこなしてみたいと思つてゐた。

ところが、こゝに、幸ひなことには、思ひがけない縁故を辿つて、いろ〳〵あの山奥の方の地理や風俗を聞き込むことが出來た。と云ふのは、一高時代の友人の津村と云ふ青年、――――それが、當人は大阪の人間なのだが、その親戚が吉野の國栖に住んでゐたので、私はたび〳〵津村を介してそこへ問ひ合はせる便宜があつた。

「くず」と云ふ地名は、吉野川の沿岸附近に二箇所ある。下流の方のは「葛」の字を充て、上流の方のは「國栖」の字を充てゝ、あの飛鳥淨見原天皇、――――天武天皇にゆかりのある謠曲で有名なのは後者の方である。しかし葛も國栖も吉野の名物である葛粉の生産地と云ふ譯ではない。葛は知らないが、國栖の方では、村人の多くが紙を作つて生活してゐる。それも今時に珍しい原始的な方法で、吉野川の水に楮の纖維を晒しては、手ずきの紙を製するのである。そして此の村には「昆布」と云ふ變つた姓が非常に多いのださうだが、津村の親戚も亦昆布姓を名のり、矢張製紙を業としてゐて、村では一番手廣くやつてゐる家であつた。津村が語つたところでは、此の昆布氏も可なりの舊家で、南朝の遺臣の血統と多少の縁故がある筈であつた。私は、「入の波」と書いて「シホノハ」と讀むこと、「三の公」は「サンノコ」であることなどを、此の家へ尋ねて始めて知つた。なほ昆布氏の報告に依ると、國栖から入の波までは、五社峠の峻嶮を越えて六里に餘る道程であり、それから三の公へは、峽谷の口もと迄が二里、一番奥の、昔自天王がいらしつたと云ふ地點までは、四里以上ある。尤もそれも、さう聞いてゐるだけで、國栖あたりからでもそんな上流地方へ出かける人はめつたにない。たゞ川を下つて來る筏師の話では、谷の奥の八幡平と云ふ凹地に炭燒きの部落が五六軒あつて、それから又五十丁行つたどんづまりの隱し平と云ふ所に、たしか

に王の御殿の跡と云はれるものがあり、神璽を奉安したと云ふ岩窟もある。が、谷の入り口から四里の間と云ふものは、全く路らしい路のない恐ろしい絶壁の連續であるから、大峰修行の山伏などでも、容易に其處までは入り込まない。普通柏木邊の人は、入の波の川の縁に湧いてゐる溫泉へ浴みに行つて、彼處から引き返して來る。その實谷の奥を探れば無數の溫泉が溪流の中に噴き出で、明神が瀧を始めとして幾すぢとなく飛瀑が懸つてゐるのであるが、その絶景を知つてゐる者は山男か炭燒きばかりであると云ふ。

此の筏師の話は、一層私の小説の世界を豐富にしてくれた。すでに好都合な條件が揃つてゐるところへ、又もう一つ、溪流から湧き出でる溫泉と云ふ、打つて付けの道具立てが加はつたのである。しかし私は、遠隔の地にゐて調べられるだけの事は調べてしまつた譯であるから、もしあの時分に津村の勸誘がなかつたら、まさかあんな山奥まで出かけはしなかつたであらう。此れだけ材料が集まつてゐれば、實地を蹈査しないでも、あとは自分の空想で行ける。又その方が却つて勝手のよいこともあるのだが、「折角の機會だから來て見てはどうか」と津村からさう云つて來たのは、たしかその年の十月の末か、十一月の初旬であつた。津村は例の國栖の親戚を訪ふ用がある、それで、三の公までは行けまいけれども、まあ國栖の近所を一と通り歩いて、大體の地勢や風俗を見ておいたら、きつと參考になることがあらう。何も南朝の歴史に限つたことはない、土地が土地だから、それからそれと變つた材料が得られるし、二つや三つの小説の種は大丈夫見つかる。兎に角無駄にはならないから、そこは大いに職業意識を働かせたらどうだ。ちやうど今は季候もよし、旅行には持つて來いだ。花の吉野と云ふけれども、秋もなか〳〵惡くはないぜ。——と云ふのであつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で、大そう前置きが長くなつたが、こんな事情で急に私は出かける氣になつた。尤も津村の云ふやうな「職業意識」も手傳つてゐたが、正直のところ、まあ漫然たる行樂の方が主であつたのである。

その二　妹背山

津村は何日に大阪を立つて、奈良は若草山の麓の武藏野と云ふのに宿を取つてゐる、――と、さう云ふ約束だつたから、此方は東京を夜汽車で立ち、途中京都に一泊して二日目の朝奈良に着いた。武藏野と云ふ旅館は今もあるが、二十年前とは持主が變つてゐるさうで、あの時分のは建物も古くさく、雅致があつたやうに思ふ。鐵道省のホテルが出來たのはそれから少し後のことで、當時はそこと、菊水とが一流の家であつた。津村は待ちくたびれた形で、早く出かけたい樣子だつたし、私も奈良は曾遊の地であるし、ではいつそのこと、折角のお天氣が變らないうちにと、ほんの一二時間座敷の窓から若草山を眺めたゞけで、すぐ發足した。

吉野口で乘りかへて、吉野驛まではガタガタの輕便鐵道があつたが、それから先は吉野川に沿うた街道を徒歩で出かけた。萬葉集にある六田(むつだ)の淀、――柳の渡しのあたりで道は二つに分れる。右へ折れる方は花の名所の吉野山へかゝり、橋を渡ると直きに下の千本になり、關屋の櫻、藏王權現、吉水院、中の千本、――と、毎年春は花見客の雜沓(ざつたふ)する所である。私も實は吉野の花見には二度來たことがあつて、幼少の折上方見物の母に伴はれて一度、そのゝち高等學校時代に一度、矢張群集の中に交りつゝ此の山道を右へ登つた記憶はあるのだが、左の方の道を行くのは始めてゞあつた。

近頃は、中の千本へ自動車やケーブルが通ふやうになつたから、此の邊をゆつくり見て歩く人はないだらうけれども、むかし花見に來た者は、きつと此の、二股の道を右へ取り、六田の淀の橋の上へ來て、吉野川の川原の景色を眺めたものである。

「あれ、あれを御覽なさい、あすこに見えるのが妹背山です。左の方のが妹山、右の方のが背山、――」

と、その時案内の車夫は、橋の欄干から川上の方を指さして、旅客の筋をとゞめさせる。嘗て私の母も橋の中央に俥を止めて、頑是ない私を膝の上に抱きながら、

「お前、妹背山の芝居をおぼえてゐるだらう？　あれがほんたうの妹背山なんだとさ」

と、耳元へ口をつけて云つた。幼い折のことであるからはつきりした印象は殘つてゐないが、まだ山國は肌寒い四月の中旬の、花ぐもりのしたゆふがた、白々と遠くぼやけた空の下を、川面に風の吹く道だけ細かいちりめん波を立てゝ、幾重にも折り重なつた遙かな山の峽から吉野川が流れて來る。その山と山の隙間に、小さな可愛い形の山が二つ、ぽうつと夕靄にかすんで見えた。それが川を挾んで向ひ合つてゐることまでは見分けるべくもなかつたけれども、流れの兩岸にあるのだと云ふことを、私は芝居で知つてゐた。歌舞伎の舞臺では大判事清澄の息子久我之助と、その許嫁の雛鳥とか云つた乙女とが、一方は背山に、一方は妹山に、谷に臨んだ高樓を構へて住んでゐる。あの場面は妹背山の劇の中でも童話的の色彩のゆたかなところだから、少年の心に強く沁み込んでゐたのであらう、その折母の言葉を聞くと、「あゝ、あれがその妹背山か」と思ひ、今でもあのほとりへ行けば久我之助やあの乙女に遇へるやうな、子供らしい空想

に耽つたものだが、以來、私は此の橋の上の景色を忘れずにゐて、ふとした時になつかしく想ひ出すのである。それで二十一か二の歳の春、二度目に吉野へ來た時にも、再び此の橋の欄干に靠れ、亡くなつた母を偲びながら川上の方を見入つたことがあつた。川はちやうど此の吉野山の麓あたりからやゝ打ち展けた平野に注ぐので、水勢の激しい溪流の趣が、「山なき國を流れけり」と云ふのんびりとした姿に變りかけてゐる。そして上流の左の岸に上市の町が、うしろに山を背負ひ、前に水を控へた一とすぢみちの街道に、屋根の低い、まだらに白壁の點綴する素朴な田舍家の集團を成してゐるのが見える。

私は今、その六田の橋の袂を素通りして、二股の道を左へ、いつも川下から眺めてばかりゐた妹背山のある方へ取つた。街道は川の岸を縫うて眞つ直ぐに伸び、みたところ平坦な、樂な道であるが、上市から宮瀧、國栖、大瀧、迫、柏木を經て、次第に奥吉野の山深く分け入り、吉野川の源流に達して大和と紀井の分水嶺を超え、遂には熊野浦へ出るのだと云ふ。

奈良を立つたのが早かつたので、われ〳〵は午少し過ぎに上市の町へ這入つた。街道に並ぶ人家の樣子は、あの橋の上から想像した通り、いかにも素朴で古風である。ところ〴〵、川べりの方の家並みが缺けて片側町になつてゐるけれど、大部分は水の眺めを塞いで、黑い煤けた格子造りの、天井裏のやうな低い二階のある家が兩側に詰まつてゐる。歩きながら薄暗い格子の奥を覗いて見ると、田舍家にはお定まりの、裏口まで土間が通つてゐて、その土間の入り口に、屋號や姓名を白く染め拔いた紺の暖簾を吊つてゐるのが多い。店家ばかりでなく、しまうたやでもさうするのが普通であるらしい。孰れも表の構へは押し潰したやうに軒が垂れ、間口が狹いが、暖簾の向うに中庭の樹立ちがちらついて、離れ家なぞのあるのも見える。

恐らく此の邊の家は、五十年以上、中には百年二百年もたつてゐるのがあらう。が、建物の古い割りに、何處の家でも障子の紙が皆新しい。今貼りかへたばかりのやうな汚れ目のないのが貼つてあつて、ちよつとした小さな破れ目も花瓣型の紙で丹念に塞いである。それが澄み切つた秋の空氣の中に、冷え〳〵と白い。一つは埃が立たないので、こんなに清潔なのでもあらうが、一つはガラス障子を使はない結果、紙に對して都會人よりも神經質なのであらう。東京あたりの家のやうに、外側にもう一と重ガラス戸があればよいけれども、さうでなかつたら、紙が汚れて暗かつたり、穴から風が吹き込んだりしては、捨てゝ置けない譯である。兎に角その障子の色のすが〳〵しさは、軒並みの格子や建具の煤ぼけたのを、貧しいながら身だしなみのよい美女のやうに、清楚で品よく見せてゐる。私はその紙の上に照つてゐる日の色を眺めると、さすがに秋だなあと云ふ感を深くした。

實際、空はくつきりと晴れてゐるのに、そこに反射してゐる光線は、明るいながら眼を刺す程でなく、身に沁みるやうに美しい。日は川の方へ廻つてゐて、町の左側の障子に映えてゐるのだが、その照り返しが右側の方の家々の中まで屆いてゐる。八百屋の店先に並べてある柿が殊に綺麗であつた。キザ柿、御所柿、美濃柿、いろ〳〵な形の柿の粒が、一つ〳〵戸外の明りをそのつや〳〵と熟し切つた珊瑚色の表面に受け止めて、瞳のやうに光つてゐる。饂飩屋のガラスの箱の中にある饂飩の玉までが鮮やかである。往來には軒先に莚を敷いたり、箕を置いたりして、それに消炭が乾してある。何處かで鍛冶屋の槌の音と精米機のサアサア云ふ音が聞える。

私たちは町はづれまで歩いて、とある食ひ物屋の川沿ひの座敷で晝食を取つた。妹背の山は、あの橋の上

で眺めた時はもつとずつと上流にあるやうに思へたが、こゝへ來るとつい眼の前に立つ二つの丘であつた。川を隔てゝ、此方の岸の方のが妹山、向うの岸の方のが背山、――妹背山婦女庭訓の作者は、恐らく此處の實景に接してあの構想を得たのだらうが、まだ此の邊の川幅は、芝居で見るよりも餘裕があつて、あれ程迫つた溪流ではない。假りに兩方の丘に久我之助の樓閣と雛鳥の樓閣があつたとしても、あんな風に互に呼應することは出來なかつたらう。背山の方は、尾根がうしろの峰につゞいて、形が整つてゐないけれども、妹山の方は全く獨立した一つの圓錐狀の丘が、こんもりと綠葉樹の衣を着てゐる。上市の町はその丘の下までつゞいてゐて、川の方から見わたすと、家の裏側が、二階家は三階に、平家は二階になつてゐる。中には階上から川底へ針金の架線を渡し、それへバケツを通して、綱でスルスルと水を汲み上げるやうにしたのもある。

「君、妹背山の次には義經千本櫻があるんだよ」

と、津村がふとそんなことを云つた。

「千本櫻なら下市だらう、彼處の釣瓶鮨屋と云ふのは聞いてゐるが、――」

維盛が鮨屋の養子になつて隱れてゐたと云ふ淨瑠璃の根なし事が元になつて、下市の町にその子孫と稱する者が住んでゐるのを、私は訪ねたことはないが、噂には聞いてゐた。何でもその家では、いがみの權太こそゐないけれども、未だに娘の名をお里と付けて、釣瓶鮨を賣つてゐると云ふ話がある。しかし津村の持ち出したのは、それとは別で、例の靜御前の初音の鼓、――あれを寶物として所藏してゐる家が、こゝから先の宮瀧の對岸、栞摘の里にある。で、ついでだからそれを見て行かうと云ふのであつた。

菜摘の里と云へば、謠曲の「二人靜」に謠はれてゐる菜摘川の岸にあるのであらう。「菜摘川のほとりにて、いづくともなく女の來り候ひて、――」と、謠曲ではそこへ靜の亡靈が現じて、「あまりに罪業の程悲しく候へば、一日經書いて賜はれ」と云ふ。後に舞ひの件になつて、「げに耻かしや我ながら、昔忘れぬ心とて、……今三吉野の河の名の、菜摘の女と思ふなよ」などゝあるから、菜摘の地が靜に由緣のあることは、傳說としても相當に根據があるらしく、まんざら出鱈目ではないかも知れない。大和名所圖會などにも、「菜摘の里に花籠の水とて名水あり、又靜御前がしばらく住みし屋敷趾あり」とあるのを見れば、その云ひ傳へが古くからあつたことであらう。鼓を持つてゐる家は、今は大谷姓を名のつてゐるけれども、昔は村國の庄司と云つて、その家の舊記に依ると、文治年中、義經と靜御前とが吉野へ落ちた時、そこに逗留してゐたことがあると云はれる。なほ附近には象の小川、うたゝねの橋、柴橋等の名所もあつて、遊覽かた〳〵初音の鼓を見せてもらひに行く者もあるが、家重代の寶だと云ふので、然るべき紹介者から前日に賴みでもしなければ、無闇な者には見せてくれない。それで津村は、實はそのつもりで國栖の親戚から話しておいて貰つたから、多分今日あたりは待つてゐる筈だと云ふのである。

「ぢやあ、あの、親狐の皮で張つてあるんで、靜御前がその鼓をぽんと鳴らすと、忠信狐が姿を現はすと云ふ、あれなんだね」

「うん、さう、芝居ではさうなつてゐる」

「そんなものを持つてゐる家があるのかい」

「あると云ふことだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com